

6 オーウェルとモーム*

サマセット・モーム (William Somerset Maugham, 1874-1965) の「南海もの」と言われる短編集の中には、英領植民地での生活に適応出来ずに苦悩するイギリス人を描いたものが幾つもある。例えば「機会の扉」(“The Door of Opportunity,” 1931) は、イギリスのある植民地に派遣されていたアルバンが、原住民の暴動に恐怖心を抱き、現場に急行出来なかったが故に解任される物語で、その際に当地の総督は、アルバンに「もしこの管轄の役人達が理不尽な危険を冒すのに二の足を踏んでいたならば、ここは決して大英帝国の領地にならなかつたらう」(AK 92) と述べる、といった具合である。

一方、ジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-1950) は1922年、英領インド帝国の警察官としてビルマ (現ミャンマー) に着任し、5年ほどその仕事を続けた。当地でオーウェルは帝国主義の弊害を知り、後に「絞首刑」(“A Hanging,” 1931), 『ビルマの日々』(*Burmese Days*, 1934), 「象を撃つ」(“Shooting An Elephant,” 1936) といった作品を書くが、これらは植民地経営者の苦悩が描かれているという点でモームの「南海もの」と共通している。

勿論両者の立場は大いに異なる。オーウェルは行動の人であり、モームは観察の人だった。オーウェルは全体主義に反対し、自分が理解する意味での**民主的社會主義 (Democratic Socialism)** の為に書き続け、政治的闘争の必要性を説き、彼自身それを終生実践した。一方モームは、小説家の目的は読者を教えることにあるのではなく、楽しませることにあるという立場で書き、政治への関与は作家にとって有害であると考えていた。

このように両者は極めて対照的だが、自分の文学の枠内ではいずれも正直且つ誠実であった。例えば当時のイギリスの繁栄は帝国主義的な植民地経営に依存しており、これを止めれば大不況に陥るのは必至だったが、この現実を認めるのは愉快なことではなかった。植民地経営者の苦悩にしても知りたくない現実だった。オーウェルは帝国主義に反対する立場だったが、そういったことも世に知らせずにはいられなかった。モームはオーウェルとは異なり、植民地という環境に置かれた白人の心理と行動に関心を示し、それらを描き出したが、彼も知られざる帝国主義の一面に光を当てることになった。

2人の作品で類似性の強いのは上述の作品だけであり、両者は本質的に異なる作家である。しかし、その時代の考え方への反逆者であるという点では共通する。オーウェルは社会主義者だったが、当時の左翼陣営の不正や欺瞞を厳しく批判し、

彼らにとって不都合な事実を次々と暴露した。モームは、神無き現代に於いては善悪もまた相対的なものに過ぎず、結局は自分自身に正直に生きるしかないという結論に達し、その立場から矛盾に満ちた人間の諸相を書き続けた。故に既成の道徳理念や社会通念とは真っ向から対立した。

その結果、オーウェルは社会主義者でありながら左翼陣営から睨まれ、後年「もし自由に何らかの意味があるのだとすれば、それは人々が聞きたくないことを言う権利だ」(AF 108)と言わざるを得なかったし、モームも「私はシニカルだと言われてきた。人を実際以上に悪く見えるように描くと非難されてきた。(中略)私は多くの作家達が見ようとしない幾つかの特質を一際目立つようにしただけだ」(SU 55)と洩らしている。オーウェルもモームも人を嫌がらせる為に書いたのではない。しかし両者とも自分が見た真実を書くにあたって物議を醸したり、世間と対立したりすることを意に介さなかった。

オーウェルは「私に最も大きな影響を与えた現代の作家はモーム」(CE-2 39)と述べている。2人とも明晰な文を書くという点では定評があり、オーウェルが大先輩のモームの作品を読み、そこから文字通り率直で飾り気なく、面白く物語を進める手腕を学んだのは間違いない。先のビルマ時代に基づく3作品を書くにあたって、オーウェルがモームの「南海もの」を読んでいた可能性は高いし、『牧師の娘』(*A Clergyman's Daughter*, 1935)に登場する享楽主義者ウォーバートンの思想にはモームの影が見え隠れする。また言及される機会は少ないものの、オーウェルは『空気を求めて』(*Coming Up for Air*, 1939)の中で、モームは『劇場』(*Theatre*, 1937)の中で技法上の実験(意識の流れ)を試みたとし、両者の宗教に対する考え方にも類似性が認められる。

他方、少なくともオーウェルの著作を見る限り、両者の間に親交があった形跡はない。しかし、それでもオーウェルがモームを非常に尊敬し、モームから最も大きな影響を受けたというのは、勿論モームの小説家としての力量によることが大きいとしても、モームが人間をよく知っていて、自分が見て感じたこと、信じたことを書くのを恐れない、自分の文学に対して誠実な作家だったからということもあるのではないか。少なくとも2人は立場こそ違っても共に現代人の抱える問題を描き、タブーに挑戦した作家であった。

*本稿は「オーウェルとモーム」(『オーウェル研究』第14号、オーウェル会、1995年)を大幅に圧縮し、改稿したものである。